

## もう一人のマーク氏

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政経資料センター 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池内, 正直 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/10423">http://hdl.handle.net/10291/10423</a>

## もう一人のマーク氏

(専任講師 英語)

氏の論文を初めて読んだとき、胸が詰まり、心が震え、体が震えるのを覚えずにはいられなかった。それは一つには、英語で書かれた原文を美しい日本語に訳された、夫人の香りと華のある文章のせいかもしれない。だがそれ以上に、氏が教育に対して抱く、崇高な理想と熱いロマンのせいであっただろう。そこには、人間に対する無限の信頼に基づいてひたすら教育に打ち込み、のめり込んでいる姿があった。教育がなし得る可能性を、グローバルな観点から追い求めていく論述には、火を噴くようなパッションと理性的な意志の力が微妙にせめぎ合っていた。

同僚になってからの氏の姿を近くで見ると人はだれも、学生の能力も引き出したがり伸ばしたりするためのアイデアや工夫が、氏の内部に泉のように次々と湧いてくる有様に、圧倒される思いをしていることだろう。時には高い理想と現実の間のギャップもあり得るはずだが、氏にはそれを「チャレンジ」として受け取める、心の毅さがある。(教育と研究以外の様ざまの仕事も「オブリゲーション」の一つとして快く受け容れる心の柔軟さも、勿論持っている。)

キャンパス内の氏の姿は、和泉の丘にもう一つのアルト・ハイデルベルグ的な色彩を与えている。学生のおしゃべりに気軽に応じている姿や、熱心にアドバイスや示唆を与えている姿を通して。格別に熱意のある学生には、いつ何時でも教室の課題以外の指導に応じているし、夏休みに海外での語学研修を相談する学生には、英国の友人に電話までして、彼のために一層有益な指針を与えていた。まことに、体全体で学生に接し、教育の理念と実践に魂を賭けているのだ。

氏の人柄については、英国で教育を受けた人ということで、一見控えめで生まじめな人物という印象があるかもしれない。だが実は、私たちの軽薄な駄じゃれや駄ジョークにも楽しく反応してくれるし、御本人の口からもしばしばウィット

に富んだ言葉が飛び出して、本物のアメリカン・ユーモアの達人のもう一人のマークさんも三舎を避けるほどなのである。また酒については、実は英語科随一の強者Yさんはだしの豪傑である様子。

氏の当面の課題は、日本語能力の向上ということだ。学科内等で何か不都合が生じたときなど、氏は御自身のこの問題のせいにして、すべてを背負い込もうとする。私たちはこの人のこんな純粋さを、傷つけてはいけないと思うのだが。だが、このことはさほど心配はないだろう。氏自身が、近く日本語の習得に、本格的に取り組むと言っているから。もっとも、専門課程の同僚の中には、氏の日本語力が今よりもむしろ低下して、英語科はもとより学部のスタッフ全員が、英語で応待する習慣を強いられた方がいいと言っている、御当人はドイツ語が専門の人もいるのだが……。いずれにしても氏の意志は固い。そして、この人のことだから、その文章がもう一人のマークさんの文章のように『〇〇年版ベストエッセイ集』（日本エッセイストクラブ編・文芸春秋社）に収録される日も、まんざら夢ではないだろう。

本学部での私の十五年と七ヶ月は、心優しく秀れた同僚と、魅力ある学生やOBたちに恵まれて、ただひたぶるに幸せな月日だった。そんな折も折、もう一人のマーク氏という同僚と一緒に仕事をできるという、天の時地の利、そして人の和に恵まれたことは、さらに一層幸運にも誇りにも思い、あらためてしみじみとそんな運命に感謝しないではいられない。

（池内正直・記）